



# 社会科の 専科教員としての 実践で感じたことは

文 | toshi  
イラスト | 秋野 純子



## ○6年生の社会をどう教えるか

今年度はA小学校で6年生の社会科専科を仰せつかりました。これまで社会科専科は何回もやっていますが、6年生は初めてです。それで、少しの不安と期待とがありました。

不安というのは、はたしてどのくらいの子が発言するだろうかということ。数人だとしても話の内容が難しくなる傾向がありますので、ほかの子はあまり話を聞きません。ややもすると無気力、無表情。ぼうっとした感じになってしまいます。これでは子ども主体の授業と言っても空回りしそうです。

3・4年生だと柔軟性があり指導者の進め方にすぐなじんでいくでしょう。また、取り上げるのが地域の身近な事象ですので興味もわきやすいのですが、6年生だと日本全体や世界が対象とな

り、なかなかそうはいきません。

いざ授業を始めると発言者は4分の1くらい。だいたい7〜8人、多い時で10人くらいでした。まあまあといったところでしょうか。極端に少ない状況ではなかったのでホッとしましたが、それでも少ないことに変わりはなく、活気ある雰囲気とはなりませんでした。

期待というのは、6年生の社会科では日本の歴史が中心になることです。わたしはできる限り郷土の歴史事象をとり上げようと思いました。中学年ではありませんが、子どもにとって身近で、「〇分で行けるあそこ」にそんな歴史があるのか」と、驚きとともに親近感も抱きそうです。6年生でも興味関心を持ちやすいでしょう。うまくいけば発言者もふえそうです。

わたしたちの住む神奈川県には、縄文・弥生の遺跡が複数あります。(古墳時代は後述) さらに海老名市の国分寺、県内を走る鎌倉道、鎌倉の町、北条早雲と小田原城、また、戦国時代終焉を示す秀吉の小田原攻め、横浜開港時の小さな波止場、外国と貿易の道を開いた井伊直弼の銅像など、歴史の景勝地が豊富です。また近年は歴史ブームで、まちのあちこちにむかしの絵が展示されたり建造物が復元されたりしています。

これらにふれるとき、多くの子ども

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

### < toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

たちの目が輝き、強い興味関心を示しました。しかし、考え合う段階になると活躍する子はやはり一部に限られてしまいました。

### ○授業実践の様子

それではとり上げた身近な歴史事象について、古墳時代を例にふり返ってみましょう。

わたしたちのまちには全長約30メートルの前方後円墳があります。あまり知られていませんが、石碑と発掘時の写真を使って導入としました。知識が豊富な子どもたちはすべて近畿地方にあると思っていますから、「ええっ！わたしたちのまちにもあるの!？」と驚きの声を上げました。しかしその規模を知ると、今度はその小ささにつかりしていました。今は住宅になっていると知ると、「なんで保存しなかったの」と不満そうな声が上がりました。このように自分たちの地域ならではの切実な思い、驚きがありました。

教科書に載っている大仙古墳と比較しながら学習を進めました。古墳の規模の違いは権力の強さの違い、そして当時は米が富の象徴でしたから、田んぼの広がりや権力の強さを現し、それは広い平野があるか否かにかかわるということをとらえていきました。

わたしたちのまちはどこへ行ってもすぐそばに小高い丘が見えます。点在する平野も、多くは江戸時代以降のうめ立て地であることを4年生で学習しています。それらと結びつけてわたしたちのまちの前方後円墳が小さいわけを納得していきました。

しかし、授業の流れを振り返ると、子どもたちは活発ではありませんでしたが、学習内容はどうしても分かったこと、感じたことに限られ、「なぜ古墳の大きさが違うのか」「天皇の古墳なのか」「わたしたちのまちにも豪族はいたのか」といった疑問は出てこず、指導者の発問中心の流れとならざるを得ませんでした。その後、時代が進むにつれ、若干発言は増えたものの、この傾向は変わりませんでした。

### ○社会科を教えてみての反省と展望

最後に、郷土の歴史事象をとり上げる意味について、さらに深く考察してみたいと思います。一点目は、郷土の歴史は中央のそれと無縁ではないということ。互いに影響し合い関わり合っていますので、日本の歴史にはスムーズにつながるはず。

二点目は手近と身近というテーマです。奈良時代なら、大仏をとり上げるのが普通でしょう。教科書にも資料集

にも出ています。子どもたちは調べやすいし、具体的な歴史事象ですから、それこそ思考をめぐらせるうえで活発な活動が期待できそうです。しかし、それはあくまで子どもにとって手近なのであって、決して身近なものではありません。

それに対し、郷土の歴史事象は多分に足を使った探索を伴います。実際に見たり確かめたりして学ぶことができます。そこには学び方にとどまらず、生き方にも迫る学力の形成があるように思います。できる限り身近な学習を大事にしたいと思います。

